

1960年代の横浜昆虫事情 トンボ編一

福永健司

東京農業大学地域環境科学部 (fuku@nodai.ac.jp)

私の家は横浜市西区の南の端、南区と中区と接した場所で、港から見ると野毛山の裏手にあり、そこで育ちました。昔は家のすぐ近くの通りに市電が走っていましたが、こんな横浜の街中にも昆虫がたくさんいました。市街地には空き地、いわゆる原っぱがあったし、周辺には雑木林、ため池がたくさんあったからかでしょうか。

私が小学生の1960年代頃は、夏休みといえはまず虫捕りでした。家のすぐ近くには大きな原っぱがあり、端には泥沼化した浅い大きな池がありました。このあたりは関東ロームの台地に刻まれたいわゆる谷戸の頭部で、湧き水が豊富にあったからだと思います。私の家も含めて明治時代から戦後まで大きな印刷会社経営者の別荘があったそうで、その名残の池だったようです。私の家にも自然にはないはずの花崗岩の大きな庭石がいくつもあり、家の裏や隣家には今でも地下水が湧いています。夏休みになると、私は近くのその池でトンボ、ドジョウ、ザリガニ捕りに熱中しました。

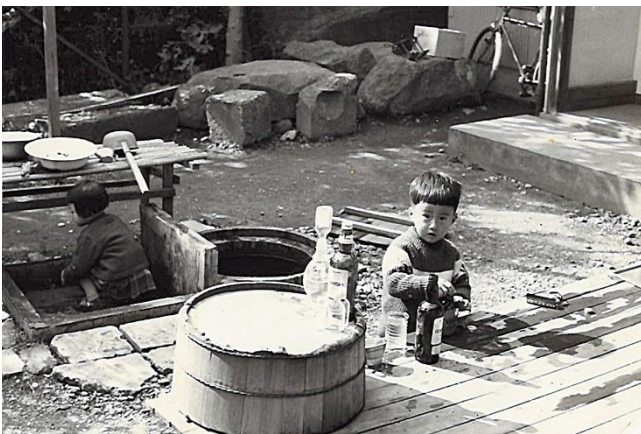
トンボといえばその頃の主役はギンヤンマでした。今、横浜中心部からいなくなってしまった昆虫の代表格はギンヤンマではないでしょうか。ほかに、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、アキアカネなど赤トンボ類、さらには糸トンボ類、ごくまれに主に流れのある水辺に棲むオニヤンマが来ました。オニヤンマを除くトンボは数も多く雑魚であって、美しく勇壮で毎日来るとは限らないギンヤンマにはかないません。胸部全体が鮮やかな黄緑色で、腹の基部背中側には個体によって白いもの、青いもの、ピンクのものなどがいて、それも捕まえる楽しみの一つでした。

ギンヤンマだけでなくトンボの多くはため池や水田、公園の池などの淡水池、流れの緩い小河川や用水路などがなくと命を繋いでいけません。その頃、横浜には家の近くでいうと南区（現在の南区と港南区）あたりにため池や小川がたくさんあって、そこから飛んできたのだと思います。1970年代に入ると宅地化や駐車場化の波が押し寄せて、近所の池も埋め立てられコンクリート舗装の駐車場と化してしまいました。

ギンヤンマが家の近くの池に来るのは早朝と夕方に集中していました。私をはじめ近所の子供たちはそれを朝ギン・タギン、交尾してオス・メス一緒になっているのをゲツター（本来は野球のダブルプレーのことですが）と呼んでいました。捕えるのに使ったものは近所の駄菓子屋で売っていたザリガニやドジョウ捕りに使う赤い糸の目の粗い網で、チョウなどに使う捕虫網ではありません。網で飛んでいるのを捕まえたり、生きたシオカラトンボをまず捕まえて、それに糸を付けて飛ばせ、襲いかかってくるのを捕まえることもしましたが、水深が非常に浅いのでビーチサンダルを履いて池に入り、ギンヤンマが水中から突き出した石や棒などにとまったところで網を思い切りかぶせて捕まえることが多かったですね。ゲツターだったら同時に2匹捕まえられる。今思えば、子孫を残そうと産卵に来ているのに可哀想なことをしたものだ...

今でも、ギンヤンマが悠々と空中を滑るように飛んできた姿、それを見つけたときに「来たッ！」と叫ぶ友達の前、自分が捕まえたときの友達に対する優越感、捕まえたギンヤンマの至近距離で見た顔の表情や体の色艶などがありありと思い出されます。それと、池の底の生暖かいヌルヌルした泥の感触も。そんなとき、池の中で転んでガラスの破片で左の掌を切っしまい、近所の町医者に3針縫ってもらいましたが、その傷跡は70歳間近の今でも残っています... しかし、トンボはほとんど見ることはできなくなりました。

お断り：何せ50年以上前の記憶だけが頼りで書いています。当時の厳密な検証は特にしていませんので、思い違いなどがあるかも知れません。お気づきの方はご指摘いただくと幸いです。



写真（左）：トンボが来る池に流れ込む湧水は複数あり、わが家の裏にもあって生活に使っていた。

それを溜める水槽と背後は文中にある花崗岩の大きな庭石（従兄弟と後ろ姿の妹）。

写真（右）：水槽には冷たい水が常時流れ込み、夏には野菜やスイカを冷やした（右が著者、左が妹）。